

真心と誇り 商人の道を築こう (4)

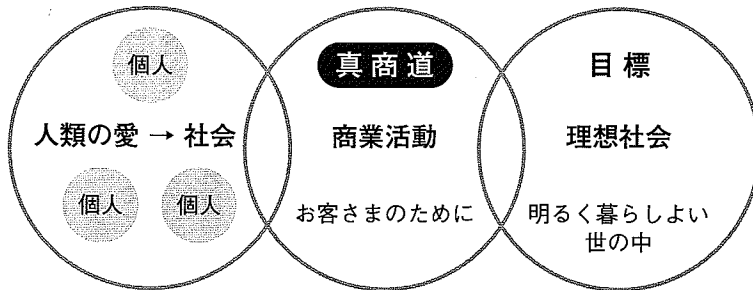
川中 清司

富山短期大学名誉教授
日専連名誉講師

日専連信条に学ぶ

日専連信条は、創始者たちが掲げた「専門店会運動の理念」を要約したもので、その内容は実に深いものである。

小売商人の社会的使命は、消費者の経済を守ることにある。「真商道」を押し進めて明るい暮らし



よい社会を築こうというものだ。

日専連信条のベースは、角南九八氏の「専門店会読本」である。その中で「人びとは愛によって結ばれ、社会は愛によって形成される」と説いている。社会は何によってできているのか。

釈迦は慈悲と説き、カントは良心の結合と説いた。日専連信条は「真商道」を進めて愛を具体化し、明るい暮らしよい社会を築こうと説いている。

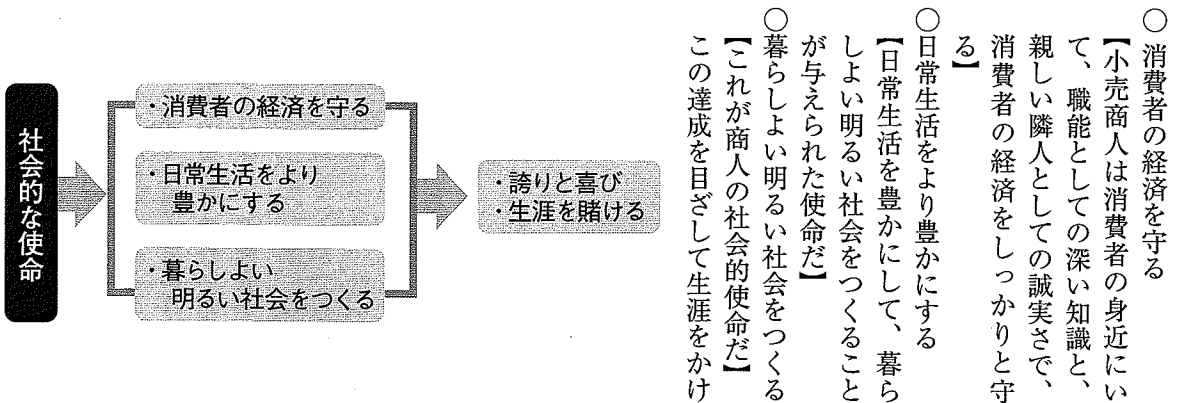
◆真商道で暮らしよい社会

- 真商道を具体的に言えば、真商道をもとに、より良い商品とサービスを提供する
- お客さまに、より良い商品とサービスを提供する
- 楽しいお買い物をしていただき、より快適な生活を提案する
- 商業を通じて明るく暮らしやすい世の中をつくる
- そのために真心をつくす
- その土台となるものは、お互いの愛の絆である

この商人としての理想をどこまでも追い求め、生きぬく商人を日専連人と呼ぶ。日専連信条は、私たちが困難に屈せず立ち上がる鋼のバネなのだ。

◆商人の使命観

日専連信条は、商人の使命を三つ挙げている。



て悔いがないと言いつつ切っている。

【それゆえにこの職業が、消費者のためにあるものであり、社会的に意義のあることを自覚する】

小売商という聖業を通じて、その信念を貫くとき、そこに商人としての誇りと生き甲斐と喜びを見出すのである。

「われ小売商人なりの誇りと喜びとに生涯をかけて悔いがない」

◆商店の意義

店は使命を果たす場だ。ここで小売業という職業の真価が発揮されるのだ。

消費者にわれわれの使命と存在を認めてもらう場だ。

○商品と代金の取引の場ではない
○真のサービスとは信頼、友情の交換の場だ

○差し上げるのは誠実、思いやり、選ばれた商品

○いただくのは、お客さまの心からの満足・友情・代金

そこに信頼が芽生え、信用が積み重なっていく。ゲートルは言った。家の前を磨け、さすれば街は安全だ」と。

市民一人ひとりが店を磨き、道を掃き、街を良くする。これがまちづくりの基本だ。しがな小売

屋じゃない。

今こそ街を起こし、暮らしを建て直し、次の世の中を創る、時の人なのだ。

◆商人繁栄の道

商人の生き方は、どうあるべきなのか。繁栄店への道筋はどうやって描けるのか。

・経営の基本の第一は、顧客満足と信頼だ。良品を保証し、正価を守ること。快適性、お客さまの個性へのマッチ、そして楽しいお買い物の満足だ。

●つつましかな生活

日専連信条は「無駄のない経費」と「つつましかな生活」で、「消費者の負担をでき得る限り軽くするよう努める」。これが「正しい報酬と永遠の繁盛をもたらす唯一の道」という。

「今どき『つつましかな生活』なんてとんでもない。うんと稼いで派手に羽ばたいて…」というのが現代風だという人もいる。だが果たしてそうだろうか。店を率いる経営者としての「身の律し方」が大事だ。己の姿勢を正さなくては経営ができるはずがない。

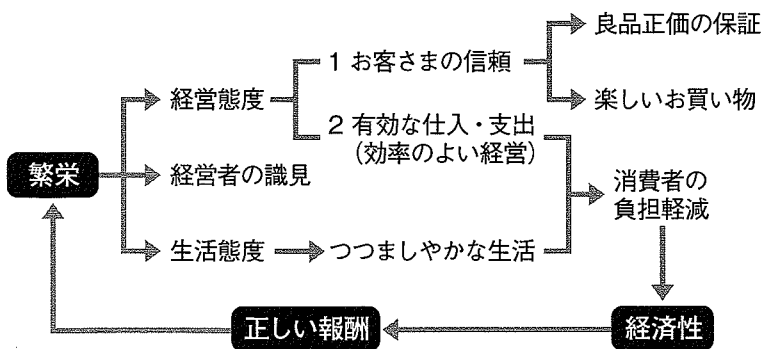
日常生活こそが、経営者の訓練の場となる。習い性となり、継続が人間を創り上げていく。

●井原西鶴 長者の妙薬

井原西鶴（江戸時代一六四二〜一六九三年）は、「日本永代蔵」のなかで長者になる妙薬の話を書いている。「朝は早起きして仕事に精を出し、夜は遅くまで働き、健康に気をつける」。

さらに次の四つを大切にしろと言う。

- ・始末＝節約
- ・算用＝勘定や財政
- ・信用＝店の生命
- ・才覚＝工夫と自己努力



いくらか始末しても勘定が合わない時にこそ、どう工夫をするかという努力が才覚だ。この金言を守り、朝夕油断なく励んで大富商になった箸屋甚兵衛を挙げている。実在した材木商の鎌倉屋甚兵衛のことだった。

西鶴は多くの実例を書いている。泉州（現在の泉佐野市）の食野・唐家もその一つだ。廻船業と倉庫

業で大成し、佐野・大阪・江戸に多くの屋敷や店を持ち、全国の諸大名に資金を用立て、その数は四〇藩を超えた。そのころ住吉大社に寄進した石灯籠が現存している。

現在、泉佐野市の商店街では、

この『長者伝説』をまちおこしに取り上げている。国の「元氣再生事業」の助成を受け、イベントなどを精力的に行っている。

● 始末は儉約・ケチらず投資

西鶴は生活態度を細かく示し、「してはならないこと」を列挙し、本業に打ち込む基本として位置づけた。日専連信条の「つつましかな生活」も、経営者として真っ向から商売に打ち込む姿勢を表している。

「始末」は「ケチ」ではない。「不要な支出を抑え、『始末』で生み出した資金を積極的に本業の投資に向けよ」というのだ。

近江商人は丁稚小僧からたたき上げ、商人の基本を体で覚えた。「読み・書き・ソロバン・思慮・才覚」、その一つひとつを奉公先で先輩と寝食を共にしながら学んだ。それに耐え、認められた者だけが商人として成長していった。

◆ 商人としての繁栄の道

日専連信条は、商人の繁栄のた

めに、「職能の確信」「人格の錬成」「結束」「協同活動」を掲げる。

○小売業という職業の大切さをはつきりと認識しよう

○商人らしい経営者としての人格を磨こう

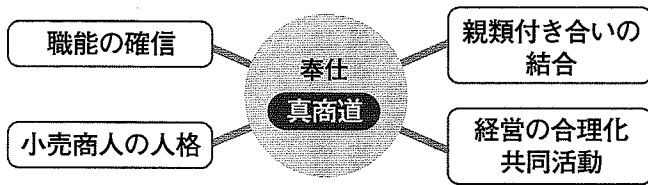
○経営の合理化、近代化を推し進め、協同活動を強めよう

○組織活動を強めるには「親類付き合い」のような絆を強めよう

◆ 職能の確信・人格の錬成

まず、「小売業が国民経済にとつて極めて重要な機能を果たす」という、根本理念をはつきりと認識することだ。投機マネーを操る悪徳商人や、ダブルに躍る勝負屋でもない。われわれ小売業は、消費生活を守り流通経済を担う立派な聖業である。その職能を確信しよう。

経営を守り、発展させるには、経営を担う人格の錬成が求めら



れる。

◆ 経営の近代化 共同活動

「絶えず移り変わる世の中に適合する経営近代化」を目ざして研修を積もう。日専連の先輩たちは実によく研修した。業種別の徹底した研究会や商店街に向いて、目で確かめながら討議した現地経営研究会。全国大会の都度、研究会を開いた。今、それらが疎かになつていないか？。

◆ 組織の強化

個々の商人が結びついて、日専連という組織体が強化される。個体では成し得ない規模の利益を達成する。その結合の元となる精神的な絆の強さは、「親類付き合い」による結合にある。日専連は創始のときから血縁のような深さで結ばれてきた。

◆ 奉仕と真商道

終局的な目標は、奉仕の理想に基づいて、真商道を実現させることだ。永遠の課題に取り組むなかで、理想が磨かれ、誇りと勇気を与えられる。

専門店会読本を信条に

昭和二八年五月六日から三日間、日専連全国大会が新潟市で開かれ



昭和 28 年 5 月 新潟大会でのパレード
日専連 40 年のあゆみ

た。「秋田の竿灯」など、四〇を超す出し物とパレードで、街は空前の人出で賑わった。大会では、日専連歌が初めて発表された。

親和と愛はわが命 心で結ぶ店と店々

感謝と奉仕捧げつつ 日専連は伸びて行く♪

全国から集まった三〇〇〇名の同志が大合唱し、感激に浸った。角南九八氏の力作「専門店会読本」も発表され、これからの活動を誓い合った。角南は考えた、「読本は長文で読みにくい。もっと簡潔に示す『信条』が必要だ」。

起草を商業指導家の岡田徹と公開経営指導協会の常務理事だった

宗像平八郎に頼み込んだ。

日専連の東京事務所が、昭和二年四月から神田会から日本織物出版社の建物へ移った。現在の神田駿河台の連盟の場所、岡田徹の研究所もその中であつた。その年の八月には岡田の推薦で宗像が日専連の東京事務局長に就任した。二人は肝胆相照らす仲だった。同じ建物の中でたびたび行き来して、熱心に日専連信条の作成に取り組み始めた。

◆ 共栄の理想社会

角南は日専連読本の中で、日専連の理念は、

○小売業者が、その立場をとおして社会共栄のために必要な役割を果たす。

○「そのために、目覚めた専門店が結集して行う集団経営の形態」と位置づけた。

その目ざすところは、

○社会善を基礎として商業道義を擁立し、以て道義の社会建設を推進する。これは、仏教でいう「慈悲の実践」「菩薩行の遂行」、さらに難しく言えば、「社会に至善の道を布くこと」である。

○菩薩行とは自らが悟りを開き、大衆を苦しみや悩みから救い、悟りの世界に導く行いをいう。

一言で言えば、最も正しい道を踏んで商売することを目的とした組織だ。

◆ 心のつながり・愛で結ぶ社会至善

日専連は「心のつながり」を基礎としている。相手を知り、理解を深め、相手の身の上を案じ、相手の悲しみと喜びを共にする。この愛によつて結ばれた社会を理想とし、商業道も愛の結合でなくてはならない。この愛こそが「社会至善」の基であり、これを護り愛の軌道から逸脱しないように設けられた柵が、すなわち社会の秩序だ。日専連の理念は、この道を社会に広め、社会秩序を建設しようと念願するにほかならない。

◆ 組織の哲学を論議

角南の理念を、どのように分かりやすく表現するのか。

日専連信条を起草した二年間、二人はよく議論した。小売商が目ざす「明るく暮らしたい社会」を、どのように訴えればよいのか。日専連は宗教団体でも思想結社でもない。角南九八の目ざす「真商道」は、利益を志向する小売商にとつて、「どういふプロセスで実践す

べきなのか」ということだ。

人のために尽くす根源は何か。仏教の「慈悲」と「社会至善」であり、信と義を重んじる「儒教」もまたしかり。いろいろな組織の

哲学論議を繰り広げた。経済学と商業の位置づけ、百貨店と中小店のバランス、そもそも商人は団結できるのかなど、机を叩いて論じ合った。

世のため人のため、小売商が役立つこと。この焦点は一致した。理論づけは宗像が、文体構成は岡田があたり、推敲を重ねた。

◆ 泣きの岡田
岡田徹と宗像平八郎の二人に共通するのはヒューマニズムだ。俗に言えば「人情に厚い人」だった。岡田は詩人を自負した。商人の心情を切々と訴え「泣きの岡田」と言われた。箱根で開かれた商業界のセミナーの夜、一人の食品店主が岡田に口説いた。

「先生、お客が来ないんだ。どうしたらいいんだ。」（手形の期日が迫る。カネがつかまる）。理屈ぬきはどうしたらいいか教えてくれ」

岡田はじつと見つめて言った。「たった一人でもいい。そのお客のために尽くすんだ」

その夜、岡田は一気に詩を書き上げた。

商売に生きる

朝だ。店の表戸を開けよう。

あなたが商人として、命をかけて悔いなき道が

そこに、大きく開ける。

あなたの今日の仕事はたった一人でもよい

心の中で、ありがとうと言つてくださる

お客という友人をつくることだ。あなたは生きがいかけたこの職業に

大きな誇りと権威を持つようよ。モット美しいモット立派な人生の生き方が

この仕事のうちにあることを知ろうよ。

（筆者にて一部カット）

翌朝、昨日の店主を見つけてこの詩を渡した。

「ありがとう先生。おれ、がんばるよ」

二人は手をしっかりと握り、抱き合っていた。

◆ ロマンチストの宗像

宗像平八郎は経済を得意とした。経済学と商人の戦略を説いた。脱

工業社会とは。経済のサービス化。二極分化。専門店とボランティアチェーンなど。よくガルブレイスの「依存効果」論を引用した。

「消費は所得だけでなく、周囲の消費行動や企業の宣伝に大きく影響される。所得が増えれば安売りのスーパーも伸び、高級高価の専門店も繁盛する…。専門店とはセンスと判断力で、消費者一人ひとりを満足させるエキスパートだ」

こんな語り口で、分かりやすく小売業のあり方を説いた。

◆じんなみ 月さば

「理論と現実の矛盾をどうする」、口角泡を飛ばした。時にはよく飲み、よく歌った。興に乗れば宗像はバイオリンを、岡田は喉を振るわせた。岡田の十八番は「じんなみ」つまり「人生の並木道」。

泣くな妹よ 妹よ泣くな
古賀メロデーに思いを込め目を潤ませた。

生きて行こうよ 希望に燃えてこの人生の 並木道
貧しさに耐えながら、明日を待つて生きる小売商の姿を浮かべていた。宗像の持ち歌は「月さば」つまり「月の砂漠」。

月の砂漠をくはるばると旅

のらくだが行きました
おぼろにけぶる月の夜を旅するらくだは、商人の姿に似ている。

対のらくだはとほとほと砂漠を越えて行きました
小売商の指導もまた遠い旅路に似ている。「日暮れて道遠く、成果はなかなか望めない。しかし決して希望は失ってはならない」自らにもこう言い聞かせていた。

◆大きな出発

昭和三〇年六月一二日、札幌はライラックの香りが漂う。日専連全国大会の会場となった中島スポーツセンターは、二つの決議で大きな興奮に包まれていた。

一つは商人の原点としての「日専連信条」の誕生。今一つは、「百貨店法制定」の促進決議だ。戦後初めて政治運動を掲げた大会だった。これを契機に全国的な商業の政治活動が高まり、翌三一年四月に鮎川義介の率いる日本中小企業政治連盟が結成。五月には念願の第二次百貨店法が制定された。こうして商業活動の調和を目ざす、わが国独自の道を開いていった。その後は、急激な流通革命が訪れる。郊外大型店の展開が商業の構造に激変を及ぼす、まさにその前夜だった。